

## 第 48 回 スイス史研究会 報告要旨

転換期ジュネーヴの知識人たち  
デュモン、プレヴォ、シスモンディを中心として

喜多見 洋

日時：2004 年 12 月 11 日（土）14 時 15 分～17 時 55 分

場所：日本女子大学「百年館」3 階 301 会議室

ジュネーヴは、スイスの西端、レマン湖のほとりに位置し、現在ではスイス・ロマンドの中心都市となっている。この町には、国連ヨーロッパ本部をはじめ国際労働機関(ILO)、世界貿易機関(WTO)、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)、国際赤十字(IRC)本部など多くの国際機関が置かれており、永世中立国スイスを代表する都市の一つとあってよいだろう。だが、この町はフランス国境に隣接し、スイスの中では少数派であるフランス語圏に属している。しかも意外に思われるかもしれないが、チューリヒやベルン、バーゼルのような他の主要都市とは異なり、ジュネーヴがスイスに加わったのは、19 世紀になってからである。これらのことからわかるように、ジュネーヴという都市は、スイスの中で、必ずしも「典型的なスイスの都市」、「スイスらしいスイスの都市」という存在ではない。けれども、むしろそのためにこの町は注目に値するのであり、この点は、転換期のジュネーヴを検討することによってはっきりする。ここにいう「転換期ジュネーヴ」とは 18 世紀中葉から 19 世紀前半にかけての時期のジュネーヴのことだが、この時期ジュネーヴは、中世以来の都市国家である「ジュネーヴ共和国」から、フランスへの併合により「フランスの一都市」となり、最終的に「スイスの 22 番目のカントン」へとそのあり方が大きく変化した。そもそもこの町は歴史的には、中世末以来 18 世紀までサヴォワ、フランスおよびベルンの勢力バランスをうまく利用しながら、それらの干渉を巧みに排除し、独立を維持して町を発展させてきた。さらに宗教的にも、カルヴァンによっていわゆる「プロテスタントのローマ」としての基礎が築かれ、新教普及の中心地として全ヨーロッパに向けて盛んに布教を行なうとともにヨーロッパ各地からの宗教的亡命者を受け入れてきた。そして今日でもこの町は、フランスの周辺にあって、フランスには属さず、またスイスの中でも歴史的、言語的、政治的に少数派の位置にあって、中心的存在ではない。すなわちフランスとスイスの「境界部分」に位置する微妙な存在と言える。

このようなジュネーヴの特殊性は、とりわけ上述の転換期に興味深い形で現われる。「転換期」のジュネーヴを、E.デュモン、P.プレヴォ、シスモンディという三人の知識人の知的活動との関連で検討してみると、ジュネーヴがスイスに加わった 19 世紀初めには、これら三人をはじめとしてその他にも個性豊かな何人もの知識人たちが町にそろう、そこにはある種の知的公共空間が形成されていたと考えられる。

また出版活動についても、ジュネーヴは、当時フランス語書籍の出版活動を活発に行なっており、知識人たちの活動を見るとベンサム功利主義やマルサス人口論、古典派経済学の大陸での普及に少なからぬ影響を及ぼしていることがわかる。このような活動が行なわれた背景には、ジュネーヴの地理的、政治的特殊性があり、とりわけ英語書籍の翻訳活動には、ジュネーヴと英国の親密なつながりが

影響している。また出版業者 J.J.Paschoud 等の活発な活動も見逃すことはできない。これらの事実が示しているのは、ジュネーヴが、フランスのメディアに対し国境を越えた場所に重要な一拠点を提供していたということである。

さらにジュネーヴは、16 世紀から 18 世紀まで、多くの宗教上の亡命者（ユグノー）を受け入れてきたが、次第に政治的亡命者も増大してくる。18 世紀以後この町は、フランスやイタリアといった近隣諸国の知的、政治的緩衝地帯の機能をはたしており、十分とはいええないにせよ、亡命者やマイナリティ、排除された者等に、自由で安全な空間を保障したと言ってよいであろう。そしてこれにもジュネーヴ知識人たちの存在が寄与しているのである。